

〈新資料〉岡本かの子「現代への仏教」  
— 全集未収録作品紹介 —

〈New material〉 Okamoto Kanoko's Lecture Outline "Gendai e no Bukkyō" (Buddhism to The Present Age)

野田直恵\*

(令和2年1月29日受理)

要約

これまでに刊行された『岡本かの子全集』等には未収録だった作品、「現代への仏教」を新資料として紹介する。仏教研究者として活動していた岡本かの子と仏教誌との関係を調査する過程で見いだされた本作は、東京帝国大学仏教青年会における「講演要項」として記されたものである。そこには作家として認められる以前のかの子の宗教と芸術についての考え方が示され、かの子の仏教の師である高楠順次郎とかの子との関係性の深さも垣間見える。作家「岡本かの子」に対する従来の評価を再考するための一材料として、この資料は有用と考えられる。

キーワード：岡本かの子、仏教、東京帝国大学仏教青年会

Keywords : Okamoto Kanoko, Buddhism, Young Buddhist Association of Tokyo Imperial University

一、『岡本かの子全集』への作品収録状況

これまでに刊行された『岡本かの子全集』は、未完結のものも含めて以下の三種類を数える。

1、実業之日本社が一九四七年から全一五巻の予定で刊行し始め、第二・六・八・一三・一四・一五巻を未刊としたまま、一九四九年に中絶したもの

2、冬樹社が一九七四年から一九七八年に刊行した、全一八巻のもの

3、筑摩書房が一九九三年から一九九四年に〈ちくま文庫〉として刊行した、全一二巻のもの

だが、これらの刊行後もかの子の作品は五月雨式に見つかり続け、それらは外村彰氏による『岡本かの子の小説〈ひたごころ〉の形象』（おふう、二〇〇五年九月）、および『撩亂の牡丹——かの子未刊随筆集』（菁柿堂、二〇一〇年三月）等に紹介されてきた。

作家の個人全集刊行後に新たに作品が見いだされることは少なくない。作家が没した直後に急ぎよ編まれたものは、〈全集〉と銘打っているも当然ながら取りこぼしが多い。作家の個人全集が〈全集〉と呼ぶにふさわしい、その作家の仕事をいちおう網羅したものとして刊行されるには、その作家の作品を調査蒐集するための時間が必要である。たとえば、岩波書店は芥川龍之介が没した一九二七年に『芥川龍之介全集』全八巻（一九二七年～一九二九年）を刊行したものの、芥川没後一〇年を機に改めて全一〇巻の全集（一九三四年～一九三五年）を刊行した。

(\*のだなおえ 保育科准教授 日本文学)

現在、この全集は研究論文などで「普及版全集」とも呼ばれているが、それはこの一〇巻本全集以降に刊行された芥川の〈全集〉および作品集等に採録される作品本文が、おおむね一〇巻本全集所収の本文を底本としているためである。

このような意味で、かの子の「普及版全集」と位置づけられるのは冬樹社版全集（前掲②）である。ところが、この冬樹社版全集が刊行された当時、世間の人々や研究者がもっぱら目を向けていたのは、作家「岡本かの子」であった。「作家として認められ作品を発表しはじめたのが昭和十一年で、なくなったのが同十四年<sup>1)</sup>」という、作家「岡本かの子」の活動期間は足かけ四年（実際は二年八か月）に過ぎない。一八八九年生まれのかの子が歌人・仏教研究者としての活動を経て、一九三六年に念願の「作家として認められ」るまでの簡単な経緯は、次のようなものである。

富裕な旧家の長女であったかの子は、早教育の一環として養育母から歌作をひもとかれた。そして、一九〇六年に新詩社同人となり、『明星』に歌を掲載するなどした。また、一方では、兄である大貫雪之助に宛てた書簡に「近頃私は地方の雑誌などへ時々小説の安原稿を書かして貰つて居ます、其内に会心のものが出来たら兄さんの御目にかけます<sup>2)</sup>」（一九一二年九月二六日付）とも記し、このころから小説の創作も試みていた。その後、かの子は愛情のもつれに端を発する精神的かつ肉体的苦悩に苛まれるが、救いを求める中で「仏教と出会い、「仏教文学」を志向することで小説家としての成長の糸口・指針を見出した<sup>3)</sup>」。かの子は仏教研究者として活動しつつ、一九二八年に「散華抄」全二五六回を「読売新聞」宗教欄に連載した。これが試金石となり、かの子は「仏教文学」としての小説の習作に本格的に取り組みはじめた。その後、約四年間の海外生活でかの子はさらに見聞を広げ、一九三六年の作家デビューを迎えるのである。

作家「岡本かの子」はこうした段階を経てようやく誕生した。にもかかわらず、従来の研究は作家「岡本かの子」の、いわば根にあたる作家以前の部分にはあまり目を向けようとしなかった。しかも、作家以前のかの子に作品発表の場を主に与えたのは、文芸誌以外の媒体であった。作家として認められていない者の作品を、文芸誌が積極的に掲載するはずもなく、かの子は歌人・仏教研究者あるいは有名漫画家の岡本一平夫人として、多岐にわたる媒体に作品を発表した。その幅広さが調査の壁となつているところに、作家以前のかの子に対する関心の薄さが重なつたのである。かの子の全集未収録作品の度重なる発見には、こうしたことが絡んでいると考えられる。

## 二、「現代への仏教」について

本稿で紹介する「現代への仏教」は、『仏教文化』第三巻第七号（一九二九年六月）八頁～一二頁に掲載された講演要項である。前掲の全集（1～3）には未収録で、外村氏の書籍にも紹介されていない。

この「現代への仏教」の掲載誌『仏教文化』は、東京帝国大学仏教青年会の機関誌として一九二七年六月に創刊されたものである。一九四三年に通号五四号で刊行は途絶されたものの、刊行元を財団法人信道会館とし、一九四五年一〇月に復刊した。現在も、一般財団法人東京大学仏教青年会が継承誌を刊行している。

以下が「現代への仏教」の本文である。本稿の他の部分はすべて現行の字体を用いたが、この資料本文の旧字・異体字等については、資料紹介という観点から、可能な限りそのままとした。（現行のATOKならびにMicrosoftIMEに同形の文字が採録されていないものは現行の字体で表記した。）

なお、本資料の紹介にあたっては、所蔵館である大正大学附属図書館、継承誌の刊行元である東京大学仏教青年会の許諾を得ている。

## 現代への佛教

岡本かの子

佛教と時代との関係は重要である。時代をないがしろにした佛教は無い。日本の佛教史だけを調べて見ても、藤原時代の殿堂佛法。鎌倉時代の民衆化。足利時代の趣味化。徳川時代の社會道德化、明治時代の學門化等の變遷がある。

以上を今少しく詳しく云ふと、藤原王朝時代は宮廷を中心に生活して居る階級の人々の間に行はるべき佛教であつた。この階級の人々は精神的要求が可成り強いものがあつたけれど美的生活に慣れ、より以上に享樂感覺が發達して居る。あまり骨らずに趣味の高い精神的安住地に到り度い。これがこの時代の人々の望みであつた。これに適應するには美的具體的形式を通して信仰や眞理を與へねばならない。すなはち其處に殿堂佛法が興つた。美しい佛像、美しい寺院、美しい儀式、美しい寫經――。

鎌倉時代は武士以下庶民階級が人生問題に關心して來た時代である。社會層の動搖、兵亂の惱み――驚愕と苦痛、それによつて外皮を剥がれた彼等の心の新生面は何等かのそれに相應はしい新らしい人生的指導精神が欲しかつた。忙しい戰亂の中に育つた彼等には落付いて教養をうけて居る暇がなかつた。その上四圍の急變には迫られるし悠長な信仰形式を待つては居られない。それ故簡單直截な佛法が布かれた。念佛や題目だけで安心を得る佛法、一句の問答で人生の歸趨を解決する禪法――。

足利時代は再び美的生活に浸つた時代である。藤原時代には似ては居るが、鎌倉時代の興奮刺激の渡の一休みである緊張のゆるんだ後の慰安である。何處かそこに靜寂を愛し無爲恬淡を望む感情がある。藤原時代の人心の望求を有福な華族階級の子女達の欲求とすればこの時代の人心の欲求は辛酸を嘗め盡した後の苦勞人の欲求である。前者をロマンチックなものとするれば後者には智的の油斷無さがある。禪は書畫、文學、舞踊等の藝術様式及び衣食住等普通人の生活様式の器に盛られ易々と世人の心的體内に燕下された。

徳川幕府の時代になつては鎖國封建制度の束縛を受け佛教は何の新らしき創出もなかつた。祖述と演繹は組織化され宗義の研究は微に入り細に入ったが人間的欲求から云へば枝葉末節と輕視されても仕方のものであつた。布教の方面も新らしい創出も無かつたが支配者幕府と協調を保ち一つの堅い範疇を造りよくそれを社會に行き亘らせ社會の道德教育情感教育には實に深い働きをした。

明治の初期は、佛教の受難時代であつた。廢佛棄釋の聲稍薄らいた頃になつても佛教はなほ逡巡の態度で居させられた、先頃或る會合で村上專精博士の談られるのを聞いたが、帝國大學に加藤弘之博士が校長の際、佛教研究を大學内へ起す相談に行つた處、「以つての外」といふことであつた。いろ／＼交渉の末それでは印度哲學といふ名にしたらまあよからうといふ事になつたといふ。この時代の世相は泰西文明の謳歌、従つて科學萬能主義、日本は西洋人の認識方法をまっしぐらに取り入れるに忙しく東洋古來の寶に積つた塵を拂ふに暇無かつたのである。従つて佛教は死人を守り葬儀を司る爲の務めばかりに追ひやられた。

この困難を経て明後半の佛教の擡頭は目覺しいものがあつた。廢れて居た寺院は再建され教線を海外にまで張つた。然し何と云つても實質的に云へば明治時代の佛教は學問の驗討を経たるに第一の効績を挙げねばならない。ただしそれが如何程困難な經路をとつて成就されたかに就いては今日六十四年の誕生日をうけらるる高楠博士はその衝に重られた一人者として尊い經驗をお持ちになられる筈である。

始め時代の寵兒であつた科學は佛教に多分の反感と侮蔑を以てその冷いメスを突き立てた。然し佛教は變通自在の不死身である。科學が來れば科學に相應しき一面を現す。信仰が來れば信仰に相應しき一面を現はす。對者に應じてそれに相應しき種々身を現すのみか、その鬭争

の過程に於て遂に相手を綜合統一して仕舞ふのが佛教の偉大さである。

元來佛教は唯心主義でも無い、唯物主義でも無い。兩者未分の究極體が宇宙内外に絶対彌滿しこれを人間意識に上せて精神上に於けば唯心となり物質上に於けば唯物となる。對時說法種々、ただ機に應じてその重心を必要なる方に移すのみ。唯心傾向の唯識論と、唯物傾向の俱舍論と一佛教中に肩を並べて暢說せるを見れば思半に過ぎよう。

で、佛教は科學の差し向けた冷たいメスのうちにもあつた。否、むしろそれを揮ふ學者の人間素の中に最充實して居るのであつたから學者は佛教を解剖して行く究極に於て却つて自己の核心にその刃先を突き當てるといふ結果を來した事は寧ろ理の當然であらねばならぬ。結局科學は佛教に對し批評的に入れたメスを返して却つてそのメスを佛教開拓の爲に揮ふ結果を來した。

扱以上の様な経程をもつて、學問尊重の時代を過し立派な學問化された佛教があるのに、何故あまり普遍的に佛教が今日世上に行はれぬのか？成程、行はれて居るには居る。それは佛教研究に携はる専門的智識階級の層と傳統的習慣的に信仰が流れて居る舊佛教勢力の層との二つの部分である。その中間の彪洋たる大衆は佛教を好きも嫌ひも無關心である。宗教は時代に生き時代の主流を貫いてこそその存在價值がある。その實際は前述した佛教歴史の通りである。

日本に現代程佛教が社會と交渉を失つた時代も少ない。これは佛教にとつての侮蔑である一大恨事といふべきである。わたくし達は如何とも佛教の名譽の爲に闘はねばならない。

現代は感覺の發達した時代である。物事を理智で判斷する前に感覺で好みをつけて仕舞ふ。「感じがいい。」とか「感じが悪い。」とかいふ言葉は始めは畫家のやうな専門美術家の間に使はれた術語であつたものが、今日では通常人の間の慣用語になつて居る。一般人が感覺的藝術家氣質になつて居る證據である。その感覺の要求にもいろいろの方面がある。一方では明るい輕快なその場限りの刺戟を要求して居る、一方では尖つて鋭い新しい深酷味を欲して居る。前者はアメリカ式の刺戟であるし後者は獨逸式の刺戟である。またその中間に味が濃やうで技巧の繊細な佛蘭西式な刺戟もあるまた棕櫚タワシのやうにタツチの荒い勇敢なロシア趣味もある、そしてその何れもが現代日本人の感覺の要求である。

文學は可成り時代を感ずるに敏感なものであるが現代の文學の新傾向を觀察して見ても思想や内容よりむしろ表現法の新らしさの研究である。表現の感觸面の性質や能力の研究である。更に一步進んで急進的な一派は形式論といふものさへ唱へ出して來て居る。例へば笑ひといふものの如きは笑ひの形が先に在るのであつて笑ひの内容は形の屬性であるといふやうな唯物論的な物の見方と人間感覺との交渉の上に新藝術を立てやうとさへして居る。

現代は官能の開放された時代である。人間生活の價値を感情や感覺の上に置く時代である。思想や内容や理智の判斷より先きに先づ好みとか感じとかの如何でもものの價値の定められる時代である。その善惡を茲に論ずる暇は無い。ただ現代は斯の如きものと觀察して其處に佛教を適應せしめる方便はわたくしは何と云つても現代人の好みを捉へる藝術に據らねばならぬと思ふ。

マルクス思想の如きも始めそれを思想として理智に訴へ確實に認識理解するもの青年士女のうちに果して幾人あつたかを疑はざるを得ない。それが現代青年士女の感覺に新規なものとして觸れそこに好みを生じ一種の流行となつて始めて現代へ異常に散布された。マルクスボーイ、エンゲルスガール。そしてこの好みを惹起したのはプロレタリア派の文學が思想を情緒化し感覺化した魅力による。

佛教を先づ現代人に好もしきものに仕度い感じの好いものに仕度い、これこそわたくし達藝術家の急務であらふとわたくしは思ふ。

根底を飽迄佛教學者専門諸先生方に護つて頂く一方藝術は安心してこの宇宙間の至寶たる佛教思想を情緒化し感覺化し現代の民衆に快く服させる調美濟と仕度い。

佛教の藝術化は現代への急務である。藝術に依つて現代に佛教を普及する大乘的行者の同志が欲しい。

(高楠博士誕生日講演要項昭和四年五月十九日)

※句点(。 )の欠落と思われる箇所や用字の誤りと見られる箇所、異なる字体の文字(研・研)等が散見するが、これもそのままとした。

### 三、新資料から見いだされる問題

新資料「現代への仏教」の末尾に付された「高楠博士誕生日講演要項昭和四年五月十九日」の「高楠博士誕生日講演」についての記録は、東京大学仏教青年会編『東京大学仏教青年会九十周年記念誌』(山喜房仏書林、二〇一〇年一月)所収の「講演会一覽」(把握できている範囲<sup>4)</sup>)に見あたらない。

ちなみに、高楠順次郎は『大正新脩大藏經』全一〇〇卷(東京大正一切経刊行会、一九二四年〜一九三四年)などの編纂の中心となった仏教学者で、「かの子」の「大藏經」講読を指導した<sup>5)</sup>、かの子の仏教の師の一人であった。その誕生日は旧暦で慶応二年五月一七日(新暦で一八六六年六月二十九日)である。

「講演」の記録が見つからない以上、この講演が実際に行われたかどうかは、不詳とせざるを得ない。しかしながら、新資料本文の「今日六十四年の誕生日をうけらるる高楠博士」という文言および末尾の「昭和四年五月十九日」という日付から、この「講演」が数え年「六十四」の高楠の誕生日(旧暦の日付)に合わせて行われ、その「要項」が誕生日の二日後に記されたということは推測できる。

また、この資料を掲載した『仏教文化』当該号巻末の「編輯後記」には「本号は全く惶惶の中に出すことになつたのでお叱りの点も多いと思ふ加藤先生宇野先生のは本会に於ける御講演の筆記、岡本女史のは御多用中特に自らお書き下すつたもので、共に深く御好意を感謝したい」と記されている。この文言から、「現代への仏教」は第三者の「筆記」などでなく、かの子自身の著作と考えてよいと思われる。なお、「加藤先生」とは中央教化団体連合会を結成したことで知られる仏教布教家の加藤咄堂、「宇野先生」とは宗教民族学研究で著名な宗教学者の宇野圓空のことである。昭和初期に仏教研究者として活動していた女性<sup>6)</sup>が、こうした人物と名を連ねていること自体、かの子の当時の立ち位置を物語っている。

この「現代への仏教」の存在に関しては、拙稿「岡本かの子と『遍路』——『円融無碍の諦め』(高野山大学図書館蔵『遍路』所収)をめぐるて——」(『高野山大学図書館紀要』第一号、二〇一七年三月)一六頁〜一七頁においてすでに言及したが、『遍路』第五卷第四号(一九三五年四月)掲載の「円融無碍の諦め」同様に、「現代への仏教」の発表時期も、一九二八年の「散華抄」連載から一九三六年の作家デビューまでの期間に入っている。この期間、かの子は小説の習作に取り組みつつも、自身の救いとなった仏教を広めるべく、仏教研究者として旺盛な執筆活動を行っていた。現に、この期間に刊行された『仏教文化』からもかの子の作品は複数見いだされ、それらはすでに全集等に収録されているのである。本稿での取り組みも合わせて『仏教文化』とかの子との関係をさらに探れば、当時のかの子がそこにどのような仏教観あるいは

自己像を示そうとし、それを当時の仏教界やエリート青年らがどのように評価していたのか、その評価と作家「岡本かの子」に対する従来の評価との乖離も見えてきそうに思われる。だが、このことについての考察は他の機会に譲りたい。また、今後もこの期間に刊行された雑誌等から、ことに仏教と関わりのある刊行物から、全集等に未収録のままとなっているかの子の作品は見いだされるものと考えられる。引き続き、この期間の雑誌等の調査も進めたい。

〈引用文献〉

- 1) 福田清人／平野陸子『岡本かの子』人と作品27 Century Books（清水書院、一九六六年五月）一一〇頁。かの子は「鶴は病みき」（『文学界』一九三六年六月）で世間的に作家として認められるようになり、旺盛に作品を発表し続けたが、一九三九年二月に没した。
- 2) 「書簡」（『岡本かの子全集 第一五巻』冬樹社、一九七七・九）九三頁。岡本かの子の旧姓は大貫、大貫雪之助の筆名は大貫晶川。かの子が「地方の雑誌などへ」「書かして貰つて居」たという「小説」については現在も不詳。
- 3) 拙稿「岡本かの子『散華抄』論——小説家としての出発点」（『国語国文』第八一卷第四号、二〇一二年四月）三四頁。
- 4) 東京大学仏教青年会編『東京大学仏教青年会九十周年記念誌』（山喜房仏書林、二〇一〇年一月）一二二頁。
- 5) 外村彰『岡本かの子の小説（ひたごころ）の形象』（おうふう、二〇〇五年九月）五九頁。